

STRONEST

螢司教

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あらゆる危機から人々を救つた最強の者、STRONESTが悪とされる時代。

彼らの子孫も同じ扱いを受け、政府から追われる身であった。

そんな中、最強の反逆者、「STRONEST OF TRAITOR」と称される青年を筆頭に、色々なSTRONESTが真の自由を求め、あらゆるものに闘い挑んでいく…

目

次

序
章

エピローグ

出会い

知らされる真実

来たるべき時

16 9 5 1

序章

エピローグ

かつて、世界規模の大災害が起こつた。

人間を含む地球上の生物の半分以上は死に絶え、建物もほとんど一掃された。

協力した。

かたし人口の關係で
一の都會したてまつて
他們は木や畠が只在
するばかりであつた。

そこから数十年、また新たな流行り病や自然災害に見舞われた。当時の技術は癌を含むほとんどの病を治せるし、ある程度の機械化による雇用者の増大など、人間が困らない生活を送れるほど発展していく。

いた。

そんな時、急にそれらを解決するものが現れた。

あらゆる病を治すもの、破壊されたものを直してくれるもの……あらゆる場面で優れた人物たちが現れ、さまざまな困難から人間を救つ

人々は、彼らに尊敬の念を込めて「STRONEST」と呼んだ

そしてその時代から、また数百年……

彼らは、人々から悪とされた。

ある市場にて…

大声が響き渡る。

「捕まえてくれえ！泥棒だあ！」

大勢の人の中、二人が間をかき分けていく。

「待てこのやろおー！」

人で溢れているのに、見失わないとは中々凄い店主だ。まあ、追いかけられてる側も特徴的な容姿をしていたためであろう。

桃色の頭髪で片方にみつあみをしており、比較的温暖な気候であるにも関わらず、短めのスカーフに青色の短いコートを羽織っている。ただやはり暑いのだろうか、腕は捲つてあり短パンを履いている。ちなみに靴はロングブーツだ。

若干走りにくそうな格好をしていても、店主はその泥棒と大きな距離を離れていた。

「待てつて言われて待つやつはいねーよ！それにあんたのとこのセ

キユリティイが甘いからこうなんだよーっ！」

正論（？）を突きつけられ、店主はもちろん激昂。

先ほどよりもスピードを上げ、こちらに迫つてくる！

執念、ていうやつ？ 恐ろしいものだ。

「まあ人も少なくなつたし、こつちもちよつとだけ本気…」

出しますか！

その瞬間、店主との距離がみるみる離れていく。

まるで先ほどの必死の競争が準備運動のように感じる。

ふと後ろを見ると追いかけてくる人が二人増えてる。

そういえばさつき警官とすれ違つた気がする…

だが二人の警官も追いつくことなく、泥棒の少女、シーカは町外れにあるスラムへ逃げ込んでいつた…

同時刻、同じ場所にて

市場が騒がしくなつて いる頃、また違う騒々しさがあつた。

聞けば、政府が最重要指名手配している人物らしき者がこの町に入つてきたらしい。

ただ訂正しておきたい。

俺はその張本人だ。

その青年は町人から聞いた話に心の中でつつこんだ。

赤黒い頭髪は肩にかかるまで伸びているが、片方だけ耳もとらへんまでしかない。

ジャージの中にノースリーブのタンクトップをきており、下はジーパン

パン。ただしジャージの左肩当たり、ジーパンのベルトの左側にチエーンを巻いており、二個のベルトをしている。頭髪以外は、ちよつと悪そうな兄ちゃんがしている服装である。

「ふむ、この町にいると聞いたんだが…」

先ほどから聞き込みをしているが、全然見つからない。普通ではない速度で走る人物、と言えば分かるはずなのだが…

本当に、ただの噂だつたのか…?

するとその眼前を、少女が通りすぎていつた。

常人が出すスピードではない…

待てよ? 確かやつの特徴は…

すぐさま懐にしまっていたメモ帳を見る。

・少女 当てはまつてている…

・桃色の頭髪 これも…

・異常なスピード これもだ…

すべて当てはまつてている!といふことは、やつが!

「やつと見つけたぞ…最強の盗賊、シーカ・ベンダバール!」

青年はすぐさま、少女を追いかけた。

出会い

ハア……………ハア……………

喘ぎ声が、何もしないスラムに響き渡る。

賑やかだった町も遠くになり、耳を澄まさなければ聞こえないほど騒々しさは小さくなっていた。

「フウ……」まで来れば、大丈夫だな。へへつ。

しかし今日は大収穫だなあ！でかいフランスパンも、チーズも手にいれた！ニンジン、タマネギ、アボカド…野菜も多くゲットした！シーカは満足そうな足取りで、目立たない廃墟に向かつた。

「ただいまーっ！」

誰もいない空間に、帰還を告げる挨拶がこだまする。すると、闇の中から足音が聞こえてきた。

一人ではなく、大勢のものようだ。

まもなく足音は大きくなってきた。そして…：

「おかえりーっ！」

すぐにシーカは子供たちに囲まれた。

遅れてその子らの親たちや老人が蠟燭を持ってシーカを出迎えた。

「おかえり、シーカちゃん」「けがしていないかい？」

「お疲れ様あ

労いの声、心配の声、出迎える声がシーカを包み込んだ。

「おかえり、シーカや」

「あつ、じいちゃん！」

最後に、男性の老人がシーカを出迎えた。

子供たちをかき分け、その老人のもとに近づく。

「じいちゃん：体力おちてんだからわざわざ出迎えなくとも…」

「何を言つとる！ ワンラを救つてくれてる英雄を、そんざいな扱い出来るか！」

「な、何言つてんだよ」

たいしたことしてないのになあ。

老人の言葉に続いて、皆も誉め称えてくる。

「そうよ、私達の子供の面倒も見てくれるじゃない。」

「家事も手伝つてくれるじゃないか。ほほ毎日奔走してるので…」

「うん！ そーだよ、シーカお姉ちゃん！ 前もボクたちを虐めてきた野良犬を追い払つて助けてくれたじゃん！」

も、もうやめてくれえ、恥ずかしすぎて死んでしまう。

「わ、分かつたからとりあえずごはん作ろうぜ！」

何とか称賛の声を遮り、ごはんを作ることになつた。

皆食事を終え、それぞれ自由時間になつた。

子供たちは、外が暗いので室内ではしゃぎまわつたり、絵本を読んだりしていた。

大人や老人は家事をしたり、ただ駄弁つたりするのを楽しんできた。

この騒がしさに呆れながらも、シーカはこの笑顔が絶えない毎日が好きだった。

(このままこんな日が続けばいいのに)

シーカがそんなことを考えた矢先、

「すまない。尋ねたいことがあるのだが…」

男性が入口から顔を覗かせた。

急であつたこと、相手が男性であること、夜であることから、シーカを含む壇内にいる全員が警戒した。

男性（よくみると青年）の目には困惑の感情が映つた。

「おやおや、誰か訪ねて来たのかい？」

皆がピリピリするなか、いつも通り落ち着いた口調で男性老人が奥から歩いてきた。

「ああ、二つ用件があるのだが」

「ふむ、構わんよ。さあ中に入りなさい。」

老人は青年を中にいれ、近くの椅子に青年を座らせる。

「さて何用かな？」

こんな怪しい余所者を中心にいれて大丈夫かと、シーカは内心心配していた。

だが同時に、老人の人を見る目も信頼していたために、何とも言えないわだかまりがシーカを苛む。

「助かる。一つは今宵泊まる場所が無いから、ここに泊めてくれないか？」

「ふむ、そのことなら構わん。」

老人は青年の願いに即答する。そして返事を聞くと青年はすぐに次の話題に移つた。

「感謝する。一つ目は情報を提供してほしい」

「ほほう、どんなことを知りたいと？残念じゃがこここの土地の価格は知らんぞい」

「すまないが、俺は地上げ屋ではない」

いつものようにおちやらけてる老人と冗談に答える青年を見て、徐々に全員の表情が和らいできた。

だが次の青年の言葉が、先ほど以上に場の空気を凍りつかせた。

「足が異常なほど早い盗賊がここにいるのは本当か？」

驚きながらも皆は一気に青年に目を向け、シーカを守るようにシーカの周りに集まつた。

だが、老人はまったく動じない。

あまりに驚いて腰でも抜けているのかと心配していると、老人は口を開いた。

「皆、大丈夫。彼はただ伝えなければならぬことがあるだけじゃから」

その言葉に続いて青年がうなづく。

皆の顔が困惑の表情を見せる。

確かに得体の知れない者が安全だと言われてもすぐには飲み込めないだろう。

だがシーカは老人の言葉を信じ、皆をかき分けて青年と老人の前に立つ。

「お前が例の盗賊か？名前は？」

老人の方を見ると、大丈夫だと言わんばかりに優しく頷いている。

「私はシーカ・ベンダバール あんたが言う件の盗賊だ。 あなたの名前は？」

つい防衛本能で強気な態度で出てしまう。

「すまない、事情で今は話せない。」

盗賊であることを知りながら名前を言わない青年に消えていた不信感がまた集まつてくる。

しかし

「だが俺は、お前と同じ存在だ。」

この言葉がシーカを驚愕させた。

知らされる真実

シーカの頭は真っ白になつていた。

自身の出どころは、じいちゃんやスラムにいる人達しか知らないはず。

しかしこの青年は、知つてか知らずか自分と同じ生まれだと言つている。

思考が戻ると、シーカは腰元に掛けていたダガーに手を添え、青年に警戒した。

考えすぎかもしれないが、指名されてこんなこと言わわれれば誰しも身構えるだろう。

「心配するな。取つて食おうとかはしない」

私の動きを察知してか、青年は敵意が無いことを示した。

同時に

老人も大丈夫だと頷く。

老人を信じ、シーカは添えていた手をどけた。

少しの間、沈黙が訪れ緊迫した空気が張りつめる。すると

「よし皆！もう夜も遅いし、寝よう寝よう！」

急に老人が明るい声で言う。

皆唖然としながら、諦めるようにそれぞれの寝床へ向かつた。

シーカも戻ろうとしたが、老人が引き留める。

「シーカ、お前はまだ起きて、青年とワシの部屋に来てくれ

お前はあの子から聞かねばならぬことがある」

先ほどのふざけた雰囲気は無く、眞面目な表情で頼む老人の指示に従い、シーカは共に老人の部屋に向かつた。



部屋に着くやいなや、老人は部屋の前で待つと言い二人を中心に入れた。

：

……

き、気まずい……

何で一緒に入つてこないんだよ、じいちゃん！

さつき大丈夫だよとか合図するから、事情知つてるのかと思った
じゃんか！

くそ、ちょっと前に読んだ古本の見すぎで緊張する！

これからは少女マンガはたまに見るくらいにしよう！

い、いやいや、こんなことを考へている場合じゃない！そ、うだ、話

を聞かなければ！こほん、まずは……

「話つて何だ？二人きりでしか話せないほど重要な話なのか？」

「ああ、察しが良くて助かる」

青年は全くぶれずにたんたんと述べる。

「さつきは名乗れずすまない。俺の名前はレベリオ・シユテルクスト
STRONESSTの一人だ」

！成る程、名乗れなかつたのはそういう訳か！

STRONESSTの人らは全員、政府によつて世界中の人々に名前
を知られている。

悪いことに、その名前はスラムのような無法地帯や裏社会外にも行き
届いていたため、どこにいてもそう易々と名乗ることが出来ないの
だ。

目付きの悪い仮面してゐるけど、こいつも苦しい思いをしてきたん
だな……

しかし、レビリオ・シユテルクストかあ。聞いたことが無いな……
でも

「そのSTRONESSTの人が私に何の用だ？」

率直な疑問だつた。

彼が来たのは私に話すことがあるからだろう。
でも何故私なんだ？

確かに自分が他の人と違うのは分かる。だけどそれはただ足が速
いだけであつて大したことないぢやないか。

考えている内に青年は衝撃的な発言をする。

「シーカ・ベンダバール 一ヶ月前にお前の父親が死んだ
よつてお前がSTRONESTになつた」

……は……

ハア!?

ど、どうゆーことだ?

私の父さんが死んだ!?

私がSTRONEST?

何がどうなつてる?

「急にこんなことを言われてさぞ混乱してるだろう」

レベリオはまた冷静に話す。

だが取り乱していたためか、私は青年に対し乱暴に発言してしまった。

「当たり前だろが!そもそも何でお前が私の父親を知つている!」

シーカは物心つく前からここ、スラムにいる。

運よくスラムと言つても暴力が支配する無法地帯ではなく、単に貧しい者たちがいるだけだった。

そしてここスラムの人々は手を取り合つて生きる優しい心の持ち主ばかりだつた。
だから彼らはシーカを受け入れた。

そしてシーカは成長し、健やかに育つていった。

ある日、シーカは老人に自分の親はどうしたかを聞いた。

すると老人は、母親は事故にあつて死に、父親はシーカをかばつてどこかへ去つてしまつたと教えてくれた。

その日、シーカは一日中泣きわめいたことを覚えていた。

だが今レベリオが言つたことは、二ヶ月前まで父親が生きていたこと、更に自分の父がSTRONESTであることを意味するのだ。

知らぬ内に自分を助けてくれた父親を尊敬し、帰つてくることを信じていたシーカには、そんな情報がとても本当だとは思えなかつた。

「嘘だ！そんなこと！・テメエの話なんぞ聞く必要もねえ！」

感情を抑えられないシーカは直ぐ様部屋を出ようとする。

だがレベリオはシーカの肩を掴みそれを阻止した。

「シーカ・ベンダバール 最後まで話を聞け」

「何なんだよテメエは！ いきなり訳わかんねえこと言いやがって！」

激情が止まらない。

「だつて私の父さんは！」

メラメラと怒りが煮えたぎつてくる。

「私の父さんは…」

嘘だ。絶対に信じないぞ。

「…父さん、は…」

死んだなんて、絶対に

「…父、さん…」

父さんが、死ぬわけない

シーカはその場にうずくまり、すすり泣いた。

だがレベリオはお構い無しに、しかも全く変わらぬ様子でシーカに語りかける。

「シーカ・ベンダバール、話を聞いてくれ

父の意志を、お前は知るべきだ」

シーカは静かに頷き、顔を下に向けたままレベリオと向かいあつた。



シーカの父親の名前は、ラーミナ・ベンダバールという。

何でも、STRONESSTによるレジスタンス組織『レギオンファアリベルター』の頭領だったそうだ。ちなみにレベリオもそこの一員だつたらしい。

彼はリーダーシップや統率力は無かつたものの、人情深い性格から他のSTRONESSTからも慕われていた。

彼らはレジスタンス組織だからと言って暴力で訴えるのではなく、貼り紙や慈善活動によつて改革をもたらそうとした。組織には、血気盛んなSTRONESSTが多かつたが、ラーミナの存在が彼らにそうさせたのだ。

ラーミナは、争うこと無くこの問題を解決できると信じ、ひたすら活動を続けていた。

だがそれも虚しく、無慈悲な政府による弾圧によつて壊滅させられた。

この時、レベリオを含む数人のSTRONESSTは逃げ切つたが、その後の行方は知らない。

そしてこの逃がしたSTRONESSTたちを守り、ラーミナは亡くなつた：



「…以上が、お前の父親の生きざまだ」

レベリオは、シーカに父親のことを全て話した。

「優しい、人だつたんだなあ」
やつぱり……

「優しい、人だつたんだなあ」
涙ぐみながらもシーカは言う。

父さんはやつぱりすごい人だつた。
私に会いに来てくれたのは心残りだけど、でもちゃんと知れて良かつた！

シーカは心の底からレベリオに感謝した。
「さて、この話を踏まえてなのだが……」

レベリオが次の話題に進もうとする、が。

「？他にも何かあんのか？」

シーカは記憶にない様子で聞き直す。
思わずレベリオも困った顔をした。

「忘れたのか、まつたく……」

お前がSTRONESTになることについてだ」

シーカは思い出したかのように頷く。

そしてレベリオが次の言葉を発そうとした時、シーカはストップの合図を出した。

「その話は、また明日にしてくれねえかな？
まだ心の整理が出来てないんだ」

それを聞いたレベリオは一瞬考え込み、承諾した。

「ありがとう。さてちょっと疲れたから、もう寝るわ」

シーカはドアに向かつて歩く。

「シーカ・ベンダバール」

ドアノブに手を掛けようとした時、突如レベリオに呼び止められる。

「何事かと後ろを振り向くと、レベリオはシーカに
「おやすみ」

とだけ言つた。

最後までピシッとした顔だつたので、吹き出してしまつた。そしてシーカも「おやすみ」と返し、部屋を出た。

◆某市場にて：

市場から人がいなくなつた頃、入り口にある警察官が来た。

彼は市場を見上げ怪しく微笑むと、市場に向かつて歩き始める。

「ここね…？やつが現れたつて所は」

その巨大でガツシリした体格に似合わぬ口調で呟く。

「今度はちゃんと捕まえてあげる…」

——最強の反逆者、レビリオ・シユテルクスト！——

そう言うと、彼は手に持つ手配書を握りつぶした。

来たるべき時

次の日の昼頃

建物の屋上にシーカは佇んでいた。

風に吹かれ、結んでない髪はたびないでいる。

「ふああ……ねみい」

シーカの目下にはクマが出来ていた。

昨晚、シーカは疲れずにいた。
あまりにも突然訪れた訃報に、涙を流さずにはいられなかつたのだ。

それもあるが、今の今までシーカを悩ませていたのは。

「私がSTRONESST、かあ……」

恐れているわけではない。だが、父の意思を自分が継いでいけるのか、父の願いを叶えることができるのであろうか。

そう考えるだけで決心が鈍る。

「急にあんなこと言われても、すぐに決めねえよ……」

そうぼやきながら下を見下ろすと、誰かが市場の方向から歩いてくる。

2, 3人はいるだろうか、だがスラムに足を踏み入れるのは普通の奴らじゃない。

きつと、”訳あり”なのだろう。

シーカはそう思っていたが、彼らの服装、顔ぶれを見て顔を青ざめる。

直ぐ様シーカは他の皆に呼び掛けをしに行つた。
警察が来たぞ、と。

警察とは本来、一般市民を守る存在である。

だがシーカ達は無法の地、スラムに住んでいる。

そのためか、彼らは普通の人とは見られておらず、その”一般市民”から侮蔑されている。

シーカも話を聞いただけだが、やんちゃな若者が人の目を盗んでは子供を含むスラムの住民を痛め付けたり、最悪殺してしまうことも多くあつたそうだ。
だからといってスラムの人達は抵抗はするものの、反撃まではしない。

だが市場に住む人々は揃つて言う。

”スラムの奴らは我らに害を与えてくる、痛め付けてくる”と。
確かにシーカは市場から食料を盗んだりはするが、危害を加えたことは一度としてない。

また他の住人は、主に市場からの廃棄物で生計を立てているため、市場には出ていったこともない。

だが警察は市場に住む人達の言葉を鵜呑みにし、スラムの人々を迫害しているのだ。

以前も”善良な市民を守るため”と称されたスラムへの放火が行われたりもした。

だからこそ、シーカは皆にすぐ建物内に隠れるように伝えた。

するとその場にいた全員が建物内の安全な場所に向かつた。

放火事件があつて以来、スラムの人々は各建物に安全地帯を作つておいたのだ。

だが運よく皆同じ建物にいたので、全員の安全が保証されたと言つても過言ではない。

しかもシーカが、偶然とは言えど早めに発見してくれたおかげで全員が避難できていた。

だが、その安心も空しく散つていった。

シーカと老人が皆を安全地帯に誘導している最中、一人の女性が彼女に問い合わせた。

「シーカちゃん、私の娘はどこ!?

さつきから見当たらぬの…！」

それを聞いたシーカは老人に後を任せ、女性の娘を探しにいった。

建物内を走り回り、子供がいないかを確認する。

だが、どの部屋ももぬけの殻であった。

(くそつ、いつたいどこに!?)

奴らもさすがに近くまで来ているはずだ…!)

そしてシーカは窓から警察の姿を確認しようとした。

その時目に映つたのは、道のど真ん中で人形遊びをしている少女の姿とそれに向かつてくる警察の姿だつた。

シーカは直ぐ様駆けつけようとするが、警察からも視認できる距離から少女を連れて逃げるのは難しいと考え、ひとまず隠れて様子を見る。

「うせぎさん、おちゃのじかんよ。はいどうぞ!

ありがとう、くません!」

前方から迫る危険に気づくことなく、少女は動物たちとのお茶会を楽しんでいる。

そして警察達が少女の前に立つた。

ついに少女は誰かが歩いてきたのに気付いた。

先頭に立つのはとても大柄な男性だったので、少女は今にも泣き出しそうな顔をしている。

そして大柄な男性警官は少女の前にしゃがみこむ。

このままではまずいと考えたシーカはすぐに飛び出せるように構える。

だが、その男性警官は意外な行動を取つた。

「可愛い動物さん達ねえ、アタシもそのお茶会に混ざつていいかしら?」

その体格とは見会わぬ口調で、警官は少女に友好的な態度を取る。色んな意味で意外だつた。

少女もその態度に心を許したのか、うんうんと首をふる。それに対応するように男性警官も笑顔になる。

そして少女と目線を合わせ、話を始めた。

シーカには何が起こっているかさっぱり分からなかつた。

そのまま楽しそうに会話をする少女と警官をしばらく観察してい

ると、警官は話題を変えた。

その話題とは。

「（）に泥棒がいるって聞いたんだけど、お嬢ちゃんは知らないかしら？」

紛れもなくシーカのことであった。

さしづめこの警官らはシーカを捕まえにきた、ということだろう。だが、少女は知らないと言わんばかりに首を横に振った。泥棒が誰の事か分かっているのかどうかは不明だが、自然とシーカを庇つてているのだろう。

「……本当に、知らない？」

笑顔のままであつたが、若干警官の雰囲気が変わった。だが少女はそれに気づくことなく、うんと首を振った。

「嘘ね」

少女の答えを聞いた瞬間、警官は顔をしかめると同時に少女に張り手を食らわす。

警官の力が強かつたのか、少女の体が少し後ろに飛んでいく。少女は何が起こったか分かっていない様子だ。

「やつぱり、スラムの子も汚らわしいのね…残念だわ」

そうぼやきながら警官は新たにできた少女との距離をつめる。

そして今度はあきれた顔をしながら少女と目線をあわせ、問い合わせる。

「いい？もう一度聞くわ

泥棒はどこにいるか、知らないかしら？」

少女は恐怖と痛みのあまり涙をボロボロと溢す。

だが少女はまだ首を横に振っていた。

このままでは少女が危ないと踏み、シーカは飛び出そうとする。だがいつの間にか足がガクガクと震えている。

子供でさえも容赦なく暴力を振りかざす彼に恐怖していたのだろう

う。

動かない足を説得しながら、シーカは状況観察をした。

警官も苛ついたのか、少女の胸ぐらを掴み激しくゆする。

「次嘘を言つたら、痛い目を見るわよ！」

さあ、早く言いなさい！」

そう脅されながらも少女は否定し続けているのか、乾いた音が鳴り響いている。

シーカは驚いていた。

子供が一人の人間を助けるために命を張っているからだ。

またかつてシーカは、警察が自分を捕まえに来た時には、自分を見捨てても大丈夫だと強く言い聞かせていた。

その時も子供達は「助ける！」と言つて聞かなかつたが、自分の足の速さで逃げ切れると冗談をまじえつつなんとか説得したはずだった。

だのに少女は、恐怖と痛みに苦しみながらもシーカを危険にさらさないよう、精神的に抗つているのだ。

「何故、動かない」

突如後ろから声をかけられる。

後ろを向くと、そこにはレベリオがいた。

「何故動かないかと聞いている」

青年が出すとは思えぬ気迫にシーカは体がすくむ。

それを見たレベリオは、彼女が動けぬ理由を悟つたようだ。

「成る程、お前は今臆しているのか：

まあ仕方ないことだろう

だが、お前はあの子を見て何も思わないのか？

幼いながらも恐怖に抗い、戦つている姿を見て、何も分からぬのか？」

警官への恐怖、レベリオの気迫が重なり、シーカの頭は真っ白になり何も返せずにいる。

レベリオは小刻みに震える彼女の姿を見、眼光を強くしながら喝を

入れた。

「あの子は待っているんだ、お前を！」

恐怖に抗えているのも、お前が助けてくれると信じているからだ！

お前はその信頼を、たかが恐怖で無くす気か！？

今あの子の感じている恐怖がお前に分かるのか！？

それを考えろ!!」

そう言われ、シーカは気づく。

ただ怖いだけだった。命を奪われる恐怖に捕らわれていたのだ。
だが、自分はただ見ていただけじゃないか。

あの子はそれを肉体で体感しているではないか。

そうだ、自分が持つている恐怖心なんて、あの子の抱いてるものに比べればたいしたものではないじゃないか！

今までビクビクして いた自分を鼓舞する。

気付いた時には、足の震えは収まっていた。

「やつと、分かつたか？」

レベリオがシーカに話しかける。

「…うん、もう大丈夫」

先程の怯えた表情は無くなり、今度は決意に満ちた顔をする。

「どうやらそういうらしい」

レベリオは相変わらずの無表情で返す。

そんな彼を見てシーカは可笑しくなり、少し吹き出してしまう。

レベリオは不思議 そうに首を傾げていた。

「なあ、レベリオ」

一息つき、シーカが彼の名を呼ぶ。

対してレベリオはアイコンタクトで答える。

そしてシーカは彼に頼み事をする。

「スラムの皆を、守つてほしい」

「承知した」

直ぐ様帰ってきた返事を聞き、彼女は疾風の如く少女の元へ向かつていつた。